

新連載

# 今なお輝きつづける 女性たち

## 第1回 らいてうと私

この企画は、「今なお輝きつづける女性たち」と題して、新婦人と関わりの深い女性たちを一人ひとり紹介します。第一回、第二回は新婦人の代表委員であった平塚らいてうをとりあげます。今回は、昨年の一月三日から今年の一、月三〇日にかけておこなわれた「記録映画『平塚らいてうの生涯』（羽田澄子監督）製作募金・『お話と映画のつどい』」での六人の方々のお話から、らいてうに関する部分を抜粋して掲載します。

### 自分の内面と向き合い

前日本女子大学学長

青木 生子



二〇〇一年は、らいてう没後三〇周年であり、『青鞥』発刊九〇周年に当たりまして、まさに二一世紀の幕開けにふさわしいこのような企画ができましたことをうれしく思っております。

らいてうは「生きるということとは行動することである。ただ呼吸していることではない」と語りました。私はこの言葉に胸がじんとさせられた体験がございます。

ます。らいてうはまさに女性解放運動、平和運動の旗手としての生きかたをしたと思います。

私がさらに感動いたしましたらいてうの言葉は、「わたくしの生活にわたくしの心を育てる何よりも必要なまた一日も欠かせない大事な糧、それは静かな時を持つことです。あるものに心のすべてを集中している状態を持つことなのです。これなくしてわたくしはどんな尊い経験も自分の世界のものにすることができないのです」というものです。女性の新しい人間革命の道を切り拓いていったらいてうの行動の底を支えている『自己確立』が、常に自らの内面を深くみつめることよってつくられているということでございます。

彼女のこの自己形成に深くかかわったという点で、母校日本女子大の成瀬仁蔵校長を無視するわけにはいかないと思います。成瀬校長が学生に絶えず熱をこめて語りつづけていた言葉があります。「われわれは自分の内にある本性を見いだしていかねばならぬ。自分の内にあるものを見いだし、自分で考え、自分で実行し、自分の思想をつくること、自分の内に信頼すべきものをつくることであります。この力を得るには、精神を集中し瞑想して深くおのれの心のうちに入り込んでい

かねばなりません」

らいてうは学生時代、自分とはいかなる者か、人間としていかに生きるか、これを真剣に考え、卒業近くには禅の門をたたき、修行しております。個の自覚なくして真の人間革命、人間解放はないという考えで自己の内面を鍛え上げ、堅い信念を持って何ものにもとられず、行動にまっすぐそれをつなげていって生きて、らいてうだと私は思っております。

そしてらいてうのそうした生きかたの原点に、母校の精神の影響が色濃くあつたと思っております。行動するらいてうは哲学する、思索するらいてうであると思います。監督の羽田澄子さんが「本来のらいてうは世間一般からイメージされている『女性の闘士』とは違う、何か、らいてうの内面にあるものに注目する」とおっしゃってください、私はまったく同感、共鳴いたしました。羽田さんのとらわれない自由な澄んだ目でこれまでにない、らいてうの新たな人間像が描き出されるのではないかと思います。「単なる解説に終わらせない。そして映画をこらんになつた方がらいてうに会えたような気がするものをつくりたい」とおっしゃっていることに、私は胸がわくわくする思いでいるわけでございます。

(あおき・たかこ)

## らいてうと母

作家 永井 路子



なぜ永井路子が「らいてうの映画を『くる会』の発起人に、と思われた方もいると思います。実は、私の夫の母親である黒板さきが、らいてうと日本女子大で同期だったのです。

もう母は一九七六年に九一歳で亡くなりましたが、らいてうは母にとつては非常に思い出深い人だったようです。なぜかと言いますと、家がわりあい近く、同じ方角で、学校の帰りなどにいろいろの話をしながらいっしょに歩いてたようです。母にとつては生涯の中で、女子大で過ごした何年間かは非常になつかしい時代で、その中でらいてうと偶然にもめぐり会つたわけです。

そういういきさつがありましたから、「らいてうの映画をつくる会」のお話を聞いた時、もし母がおりましたら一番に参加しただろうと思ひまして、母の身代わりのつもりで発起人の一人にさせていただきますました。

女子大にいた当時、母もらいてうも、禅宗に非常に興味を持ちまして、禅の修行にいっしょに行つたという話を聞ききました。同級生に木村まさ子さんという方がありまして、この方がさらに禅の修行に熱心で、らいてうといっしょに円覚寺に禅の修行に入つたようです。

らいてうの自伝を最近読んだのですが、そこにはやはり、神の存在とは何か、真理とは何かということをつきつめていく姿勢が見られます。真剣に自己とは何か、というようなことを問い詰める、これは当時の女子大生の素晴らしいところだと思えます。このようなことを考えることのできる女性が、明治になつて初めて現れるんですね。それまでの女性も知識はかなり豊かでしたが、自分で物事を探究し、つきつめていこうとする人は、まだいませんでした。

その後、らいてうは「元始、女性は太陽であった」という有名な発言をし、雑誌『青鞥』をつくります。けれども、当時の人々やマスコミは、らいてうのスキヤングラスな面にはかり注目して、『青鞥』で彼女が何を言ったのかということも誰も理解していません。時代の先端を行く人は孤独なんです。しかし、これで初めてらいてうは有名になつたし、「元始、女性は太陽であった」という女性の

主張も注目されたのです。

これは直接お会いした方に聞いたことですが、らいてうという方は非常にもの静かで、上流社会の婦人の雰囲気をもった人だったそうです。そのような彼女が時代にめざめ、女性の地位向上をめざした情熱を、私たちは真剣に受け止める必要があると思います。らいてうがその時、何を言いたかったのか、何をやりたかったのか、ということです。ただスロージャーガンとして、「元始、女性は太陽であった」だけではだめです。どういう時代にどういう女性がいたのかということをも真剣に考える。そしてそれをアピールすることが大切です。そのアピールに、今回のらいてうの映画が非常に役にたつと思うのです。

(ながい・みちこ)

## 思想を貫いた人

作家 落合 恵子



「人権週間」で、いろんなところで話をさせていただいていますが、そのたびに女性の人権はまだまだと痛感させられます。

たとえば、人権集会に菊の花などを胸につけた「エライ方々」がきています。

私が「エライ方々」という時は、かなりの軽蔑と怒りをこめていうのですが、その方々が「人権を大事にしましょう」と言った次の瞬間に、「でも最近の女どもはなんですか。ちよつとしたことですがセクシャルハラスメントという。私が若い時は、ちよつとさわつても誰も怒らなかつた。あれは潤滑油なんだ。一体女どもは何を考えているんだ。私が某女性にその話をしたら『そうよね。魅力があるからさわるのよね。そんなことで怒っている女って魅力がないのよね』といった」というのです。腹立たしい限りですが、もう一つ悲しいのはこういう話に女性が笑ってしまうことです。「やめなさい」と意義申し立てをすることはよくないと擦り込まれている現実があります。向かい風の時代にがんばってきた平塚らいてうがここにいたらどう思うだろうと、無念に思います。

でも、うれしい例もあります。同じような集会でエライ方が同じような話をした時、会場の隅から「ちよつと待ってよ」という声があがりました。二〇代の女性が目立ち上がって「もう一回言ってみたら。いまみたいな言い方がいかに人権を侵害しているか勉強してはどうですか。

こういうことが来賓から出てくるような会は、結局は人権がわかつてないのではないですか」とおっしゃったのです。最初はバラ、バラだった拍手を引き金にワァーという拍手が巻き起こったのです。なんとも嬉しいできごとでした。

意義申し立てすることは、勇気がいるかも知れないけど、一度言ってしまう。二度め、三度めとだんだん楽になる。このトレーニングをすると同時に、自分では言えなくても、勇気をもって立ち上がった人の足を引っ張らない、小さな声で「私もそう思うよ」って言える私たちがでありたいと思います。

平塚らいてうの『青鞥』創刊の辞「元始、女性は太陽であった」はよく知られていますが、その趣意書は今も、十分利用できると思います。

「婦人もいつまでも惰眠をむさぼっている時ではない。早く目覚めて、天が婦人にも与えてある才能を十分のばさねばならない。今、自分たちは婦人ばかりで、婦人のための思想、文芸、修養の機関として青鞥社を起し、雑誌『青鞥』を無名の同志婦人に開放する。自分たちは、他日ここから優れた女流天才の生まれ出るであろうことを心から望み、かつ信ずる」。

らいてうは、奥村博史さんとともに暮

らすときに、「あなたはどう思いますか」という問い掛けをしています。私がとても好きな次のような言葉です。

一、今後、ふたりの愛の生活の上にとどれほどの苦難が起こってもあなたはわたしといっしょにそれに堪えうるか。世間や周囲のどんな非難や嘲笑、圧迫がふたりの愛に加えられるようなことがあっても、あなたはわたしから逃げださないか。

一、もし、わたしが最後まで結婚はのぞまず、むしろ結婚という（今日の制度としての）男女関係を拒むものとしたらあなたははどうするか。

一、結婚はしないが同棲は望むとすれば、どう答えるか。

一、結婚も同棲も望まず最後までふたりの愛と仕事の自由を尊重して別居を望むとしたらあなたははどうするか。

一、恋愛があり、それに伴う欲求もありながら、まだ子どもが欲しくないとしたらあなたはどうか思うか（奥村が特別に子ども好きなのをわたしはよく知っていた）。

一、今後の生活についてあなたはどんな成算があるのか。

この八項目を、自分の最も愛する人に愛するがゆえに問い掛けています。

いまでも事実婚を貫くことは、職場

で、地域社会のなかでまだまだ大変な思いをしなければなりません。聞いてうはあの時代に奥村博史にこれだけの問い掛けをしたのです。

ある時代を、輝きながら生きた女というのには当然でしたが、長い長い人生で、自分の一貫する思想を貫き通した人は、そう多くはありません。一瞬のきらめきならやさしいかもしれません。輝き続けるということはどれほどのエネルギーと絶え間ない意思の力を必要とするかと考えたとき、心からの敬意を払いたいと思います。（おちあい・けいこ）

## 強靱な一生

岩波ホール総支配人

高野悦子



私は「元始、女性は太陽であった」という言葉は知っておりましたが、その方が先輩にあたるということは日本女子大学に入学してはじめて知りました。

らいてうさんにお目にかかった一度めは、私がフランスの映画大学に留学する一九五八年の春です。母にいわれて、姉妹三人で、成城（東京・世田谷区）のお

宅に伺いました。らいてうの夫である奥村博史さんに指輪を作っていたためでした。その時、らいてうさんが静かに座っていて、お茶をだしてくださり、奥村さんの絵の説明などをしてくださいました。

その時は、これがどんなにすごいことだったとは思っていませんでした。「なんてお美しい方だろう」ということと、耳をそばだてなければ聞こえないような細かい声が印象的で、「この方が平和運動の闘士であるとはとても考えられない」と驚いて帰ってきました。二度めは、つくっていた指輪の石をフランスでこわしてしまつたので直してもらいに伺ったときです。その二回だけです。

母の死後、私は母が一六歳の時に『青鞥』を読んで向学心に燃え、奈良高等女子師範へすすみ、友人たちが「ブルーストッキング」が手に入らないので、黒の靴下をはいてがんばっていたことなどを知りました。「元始、女性は太陽であった」ということを思いかえしてみると、世界では日本の女性はいまだ封建的で自分の意見もいえないと思われているなかで、らいてうさんは、二〇世紀の初め、既に女性の人権宣言を行っている、日本人として誇るべき人です。母もその言葉によって目覚めた女性であることを発見

して、深い喜びを得たわけです。

らいてうさんはきゃしゃな体で、生涯体が弱かったと聞いていますが、どうしてあんなに強靱な一生を送ることができたのか。最近大病をした私は、改めて志高く生きた先輩の偉大さを思いました。

(たかの・えつこ)

## らいてう先生の思い出

長崎純心大学教授

### 一番ケ瀬康子



平塚らいてう先生が、日本の女性解放の幕を開かれ、先駆者として輝かしい存在であることは言うまでもありません。それとともに、私の母校である日本女子大学の先輩でもあります。いろいろな意味で平塚らいてう先生はすばらしい先駆者として、客観的に尊敬する存在以上に、何か心のなかで先輩として生き続けています。

その平塚らいてう先生と直接お目にかかったことはありませんが、なぜか親しく感じるの、先生のお友だちであり、また青鞥社に加わっておられた上代たの先生（日本女子大学六代目学長）からい

ろいろな話を聞いたからです。上代先生は、平和七人委員会にも平塚先生をご推薦になりました、会員としても活躍をしておられました。上代先生はいつも素敵な指輪をしていらつしゃいました。それは平塚先生のご夫君、奥村博史さんが創られたものと聞きました。

また、平塚先生の思い出については、若いころ、とくに親しく存じあげていた市川房枝先生からも、時折、平塚さんという表現でお聞きしました。女性参政権運動との関係で、市川先生から聞いた話のなかでの平塚先生は、端正な方としてのイメージでした。

そのように平塚先生を親しく感じるその根底には、平塚らいてう先生が、エレン・ケイの信奉者であり、母性保護論争のときに母性主義の立場で主張されたことを知っていたからです。私はその論争のなかでの平塚先生の主張を必ずしも支持しているわけではありません。しかし、エレン・ケイについては私自身のスウェーデン社会福祉研究の大きな関心事として注目していたのです。エレン・ケイが最後に暮らした別荘にも行ってみました。平塚先生はそのエレン・ケイの母性主義を、おそらく平和の問題にも積極的に展開されたのではないのでしょうか。エレン・ケイは、平和活動家として

青鞥九〇年・没後三〇年

二〇〇一年らいてう忌

「聞こえますか

らいてうからのメッセージ」

とき二〇〇一年五月一九日(土)

開場二時

開会二時三〇分

ところ

日本教育会館一ツ橋ホール  
(東京都千代田区一ツ橋2

—6—2)

参加費 一五〇〇円



も、スウェーデンはもとより世界的にも注目された人の一人です。

なお、高校までの教科書のなかで、女性の名前がほとんど見られない状態において、平塚先生のお名前は早くから載っていました。私は高校の教員を数年したことがあります。授業の折、平塚らいてう先生は私の母校の大先輩という紹介をしながら、女性解放の意味についてかなりの時間をとりました。今回の映画ができる、平塚先生のことはいまでもなく、女性解放の意味を若い人にもっと伝えやすくなるのではないかと期待しています。(いちばんがせ・やすこ)